

第3回新本庁舎低層部等一体的利活用協議組織準備会 議事録

日 時 令和7年7月17日(木) 10時00分～11時45分

場 所 IDOBA(仙台市青葉区国分町3-3-1 定禅寺ヒルズ5階)

出席委員 猪股孝之委員、氏家正裕委員、内川亜紀委員、姥浦道生委員、
佐藤晶洋委員、高山秀樹委員、馬場正尊委員

ゲスト委員 手島慧委員

仙台市出席者 湯村剛まちづくり政策局次長、猪狩健一郎財政局次長、瀧澤孝二経済局次長、
二階堂聡都市整備局次長、河西義人建設局次長

事 務 局 本庁舎整備室、都市デザインワークス、その他関係課職員

1 開会

2 新本庁舎低層部の運営に関する基本方針(案) 市民アンケート実施報告

- ・ 本庁舎整備室より、新本庁舎低層部の運営に関する基本方針(案) 市民アンケートの件について報告した。

(報告概要)

- ・ 市民アンケートは、新本庁舎低層部を運営する民間事業者の公募に先立ち、低層部の基本的な考え方などについて広く市民の意見を募ったもの。アンケートで得られた意見を踏まえ、今後若干の修正を加えて基本方針として策定する予定。アンケートでは基本方針(案)への意見のほか、「仙台らしさ」についての意見も募った。
- ・ アンケート結果は、基本方針(案)への意見が57件、「仙台らしさ」についての意見が20件。
- ・ 基本方針(案)への意見については、「市民・企業・行政の協働・共創の場」「市民のための日常型コンテンツ」「情報発信拠点」の3つの機能を整備する方針とすることを評価する意見があったと報告。特に「市民・企業・行政の協働・共創の場」について、先日開催した市民ワークショップ「フューチャーセッション」でも参加者から期待が寄せられたと補足した。
- ・ 持続可能な運営を目指す旨も基本方針(案)に記載しており、これも重要な視点であると評価されたことを報告。その他、「これまでの慣習にとらわれずに検討すること」「時勢に合わせて見直しを行うべきであること」等の意見があったと報告。
- ・ 「仙台らしさ」については、「七夕や青葉まつりなどの市民が主体の伝統的な行事」や「公民が同じ目標に向かってチャレンジしていく市民協働」のような意見のほか、「杜の都」「自然豊か」といった意見も寄せられたと報告。

3 市民ワークショップ (FutureSession) 開催報告等

- ・ 5月と6月に開催した市民ワークショップ等について、事務局（都市デザインワークス）及びゲスト委員より報告。

（プレゼンテーション概要）

- ・ 市民ワークショップの概要等について、事務局（都市デザインワークス）より報告した。

手島委員

（市民ワークショップ開催報告）

- ・ 市民ワークショップでは、市役所及びその周辺について、現状叶えられていることとして、「イベントが多い」「公園が多い」「緑が豊か」といったような点が挙げられた。一方で、現状叶えられていないこととして、「日常利用しやすい」と「市民の交流の場」の2つの意見が特に多く出ていた。
- ・ 「日常利用」の具体例として、休憩スペース、何も無いときでも立ち寄りたくなる空間、ダンスや音楽など表現できる場、貸し本棚の設置などがあげられた。また、「交流の場」として、市民同士のほか、企業・団体・学生・市民など多様な主体が集まり活動できる場、国際交流の場、政治や政策についてフラットに話せる場などのアイディアが出ていた。
- ・ イベントに関しても、市民が自主的に、大規模でなくとも焚き火やトークイベントなど「自分ごとでできる」レベル感のイベントができると非常に良いという意見が多かった。市民ワークショップ「フューチャーセッション」の報告は以上。

（一体的利活用への期待）

- ・ 普段の活動で、若者と接する機会が多いが、若い世代の日常使いできる場に対するニーズについて、以下の4点を多く耳にする。「1. 日常利用ができる場、自由に何でもできる場所が欲しい」「2. 人と交流できる場が欲しい」「3. 気軽に表現できる場（アートだけでなく発表やプレゼンテーションなど）が欲しい」「4. やり方が分からないため、チャレンジしたいが限られた人しかできないと思っている人をサポートして欲しい」
- ・ SNSでのつながりが強い一方で、コロナ禍もあり、リアルな人とのつながりが希薄になっている。自分で主体的に動くのが難しい傾向があり、後押ししてもらわないと動けない学生も多い。また、SNSや趣味ごとのアカウントを持つのが当たり前になり、情報収集が特定分野に集中するため、広く浅い情報が入りにくくなっている。この傾向は年齢層が下がるほど強いと感じる。
- ・ 仙台市の他部局で実施された若者向けワークショップでも同様の意見が出ていた。具体的には、人のつながりが薄い、同じ趣味の人が欲しい、ちょっとした時間つぶしや若者が活躍できる場がない、相談に乗ってくれるが一緒にやってくれる大人が

少ないなど表現できる場所が欲しいといった声があがっていた。

- ・ 会社員や学生は家とオフィス・学校の往復が多く、コロナの影響から家で娯楽を過ごす時間が増え、街や人との接点が少なくなっているという印象がある。
- ・ これらの仮説を踏まえると、若年層のニーズは「自由に過ごせる場」「交流ができる場」「表現ができる場」、そして「やりたいことを支援・フォローしてくれること」であり、新本庁舎低層部や周辺エリアにおいて、これらのニーズに応え、人と街の接点を増やすきっかけ作りが重要である。
- ・ 市民ワークショップ「フューチャーセッション」でいただいた意見も踏まえると、若年層に限らず、企業や行政の人々も趣味や交流を通じて多くのチャレンジや市民協働が生まれ、人と街の接点が増えることのニーズが強いと考える。既存の仙台らしさも魅力的だが、新しい仙台らしさを作っていく上でも、人と街の接点が生まれる場所になることが大事だ。
- ・ 市民、とりわけ若い人たちについて、市役所や定禅寺通りに日常的に来ることがあまり多くなく、仙台駅前に行くことが相対的に多いのは、何らかの目的があってというより「なんとなくアクセスが良い」という面もあると思っている。市役所エリアに「行く目的」を作ることが重要であり、先に挙げたニーズを組み込むことで、「ここに行けばこういうことができる」「こういう人と繋がれる」という認識を共有することで、市民がこのエリアを訪れるきっかけになる。

(質疑応答)

氏家委員

- ・ IDOBAにも若い人が集まり、我々と大学生との接点が増えていると感じており、居場所のニーズがあることを改めて感じた。若い人はカフェなどにも集まるが、勉強禁止のルールなど居心地のいいと思える場所が少ないように感じる。アンケートやワークショップの結果から、本件への期待は強く感じられるが、この期待に応えるために「仙台市にこうしたことをやってほしい」「もっと頑張ってもらいたい」という意見はなかったか。

手島委員

- ・ ワークショップは「自分ごとでできること」をテーマにしたため、政策提言のような意見はあまり出なかった。参加者が「このくらいなら自分でもできるかな」というレベルのコメントが多かった。ただ、本庁舎への意見として明るく開放感のある建物が望ましいという意見はあった。居心地のいい場所の話に関係して思うこととして、例えば就職活動をする際など、学生は団体で行動する傾向があるが、深くお互いを理解することはあまりなく、いわゆる雑談の機会は減っていると感じる。コスパ・タイプ重視の傾向があり、時間を無駄にしない合理的な行動が増えているように思う。

4 前回ディスカッションの振り返り

- ・ 前回のポイントについて、事務局（都市デザインワークス）より説明。

5 ディスカッション

- ・ 事務局（都市デザインワークス）がコーディネーターを務め、進行。

（１）一体的利活用ガイドラインについて

①目指す姿について

内川委員

- ・ テーマ１からテーマ４のキーメッセージで、過去の流れが整理され分かりやすくなった。テーマ４の「エリアの価値向上に寄与する」は分かりやすい一方で、過去のキーワードが「賑わい」という言葉に集約されている感じがする。賑わいは結果として生まれるものであり、今回は「魅力の向上」を目指しているのではないかなと思う。
- ・ ４つの目指す姿の中央が空いているが、運営事業者からの提案でより端的に分かりやすいワードが生まれることを望んでいるのかと想像した。運営事業者と仙台市が最終的に決定する部分であり、市民に響くキャッチーなワードになると良い。市民に伝わる言葉を、よく考える必要があると思う。

コーディネーター（都市デザインワークス榊原氏）

- ・ 内川委員の前の意見（市民向けに分かりやすい言葉が必要）を踏まえ、市民向けと事業者向けで使い分けることを考えている。市民向けの部分は、運営事業者決定後に検討していく。

高山委員

- ・ テーマ２のキーメッセージ「仙台らしさを体現する」は良いが、その下のサブセンテンスが他の内容と重複しているように感じる。
- ・ 「仙台らしさ」は資料に毎回出てくるが、「仙台らしさって何だろう」という話になる。今ある「仙台らしさ」だけでなく、チャレンジを通じて新しいものが生まれていくような場所になっていくのが望ましいのでは。

佐藤委員

- ・ ４つのテーマは仙台市の立場からみて当然このような方向性になると思うので、細かく突き詰めすぎず、文言を微修正する程度で良いのではないかな。ワークショップやアンケートの結果とも相違はない。運営事業者がいないと具体的なことはできないのだから、早く公募して、運営事業者に何をさせるのかを決めることが必要ではないかな。

氏家委員

- ・ 自分が運営事業者だとしたら具体的に何をするのかを想像しながら聞いていた。具体的なお店や活動を当てはめるような議論も過年度にはしていたが、事業者が公募資料を見てすぐに事業者の役割や活動イメージが思い浮かぶようなものになっているかも重要ではないかな。

猪股委員

- ・ 一体的利活用の目指す姿は方向性が決まってきたと感じる。今後は具体的な進め方を早急に決めるべきであり、会議のための会議になっては意味がない。運営事業者公募に向けては、抽象的な言葉ではなく、市民にも分かりやすく「こういうイメージになる」という具体的な目標を設定し、事業を進めるのが良い。抽象的な表現では分かりにくいから、具体的に目指す姿を決めていき、それ以上のことは運営事業者が決まってから協力して決めるべきではないか。

手島委員

- ・ 4つのテーマを束ねる最上位のビジョンがあると、何を目指しているのかより見えてくる。市民が分かるような具体的な例示があると良いと思う。文章だけでなく具体的な姿を示すことで、市民も理解しやすくなる。

姥浦委員

- ・ 「仙台らしさ」は広い概念なので、もう少し考えた方が良いのでは。具体的に出したものを抽象化するのは良いが、そのキーワードをいくつか提示することで、具体的なイメージがしやすくなるのでは。

馬場委員

- ・ 前回より文字数が減り、頭に入りやすくなった。この抽象レベルのまとめ方がちょうど良い。
- ・ テーマ1の「多彩なチャレンジを育む」について、大規模イベントだけでなく、小さなイベントまで含むべきではないか。仙台市としてこの場所をどうしていくのか誘導する意図を強めるフェーズに来ている。現状、大規模イベントが多いというイメージはアンケートからも明らかで、それは既存の資産であると認識した。しかし、ワークショップからは日常の小さなイベントのニーズが出ている。大規模イベントだけを強調すると、誤解され日常を失いがちになる可能性があるため、工夫が必要。内川委員の「賑わい」の指摘にも関連し、大規模イベントだけでなく小規模イベントも含めて意識すべきと考える。
- ・ 抽象的な4つの概念について具体性を補うのは運営事業者で良いが、公募要項では何を運営事業者に要求するのか、例えば商業的なものかそうでないかなど、明確にした方が良い。
- ・ この場所では、大きいイベントから小さいイベントまで、「できごと」を発生させるイメージ。モノのやり取りや知識のやり取りなど形にならない生産が行われる場所がこの場所のアイデンティティになり得る。そうであるならば、それが得意な民間事業者に運営いただけるよう誘導した方が良い。

姥浦委員

- ・ 小さなイベントの舞台がここなのか、それともここでそれなりに大きなイベントをやりつつ、小さなイベントは定禅寺通やアーケードでやるのかという棲み分けを検討し

た方が良いのでは。大きなイベントは市民広場で、小さなイベントは定禅寺通など騒音が出て問題ない場所でやるなど、役割分担を考えるべきであり、波及効果も重要である。

内川委員

- ・ 4つのテーマは個々に考えるべき側面もあるが、例えばテーマ1によりこのエリアで「できごと」が生まれ、積み重ねることで、テーマ4のエリアの価値向上に寄与するといったように、それぞれ関係する部分もある。公募要項でも、その掛け合わせを意識した作り方が必要。
- ・ 「多彩なチャレンジを育む」はワークショップの結果からもニーズを感じる。
- ・ 個人的には、このエリアに来た時の「奥行きの深さ」が仙台らしさだと感じている。

佐藤委員

- ・ 大きなイベントの実施をこの場所で目的とする必要は必ずしもなく、アンケートやワークショップで出てきた日常的な小さいものが重要であるのではないか。市庁舎の周りの飲食店やショップも活用し、学生なども含め支援する必要がある。やりたいがやり方が分からないという声に対し、ハードだけでなくソフト面（相談窓口など）で支援が必要である。
- ・ 公募する運営事業者が市から何を期待されているのか自覚できないと応募できないため、ある程度細かいことを決めてしまって、公募を早く進めるべきであり、早期に運営事業者を交えて話し合いを詰めていくべきではないか。

コーディネーター（都市デザインワークス榊原氏）

- ・ 意見をまとめると、キーメッセージは概ね良いが、テーマ2の「仙台らしさ」やテーマ4の「賑わい」の表現に工夫が必要であること、テーマ1においては大規模イベントか小規模イベントかを含め、多様な方が過ごせる場を意識すべきであること、実際にガイドラインとして作りこむ際の見せ方（キーワード、イメージ図など）に工夫が必要であること、事業者公募の際には運営事業者を誘導するためのメッセージの明確化が必要であるという意見があったと認識した。これらを踏まえて再度検討し、最終案として次回お示しする。

②運営指針について

内川委員

- ・ 運営指針の骨子は最低限の項目であり、チャレンジしたい人にとっては書き込みすぎると自由度がなくなるが、運営事業者側からすると最低限書かないと守るべきことを守ってもらえない側面もあり、このようなレベルで書くのは良いと思う。指定管理者の公募時など、仕様書で細かく守ってほしいことが書かれている場合が多いので、しばらく先の話かと思うが今後検討してほしい。
- ・ 市民は活動する際、判断が難しい場合があるので、サポートすることがチャレンジを支えることにもなる。

- ・ 札幌のチカホは小さな日常の出来事を起こす場、アカプラは景色を楽しむ場と分けて考えている。

馬場委員

- ・ 運営指針はルールと推奨事項を混ぜない方が良い。禁止事項（ルール）はミニマムに、運営事業者には自由度があった方が良いが、守ってほしいことは明確にした方が良い。

コーディネーター（都市デザインワークス榊原氏）

- ・ 混在しないよう意識して記載する。

（２）協議組織のあり方について

猪股委員

- ・ 議論は尽くされていると思うので、ある程度コンセプトを固めて、具体的に進めてほしいが、示されている役割等はいつ決めるのか。

コーディネーター（都市デザインワークス榊原氏）

- ・ 次回の準備会で決定したい。

氏家委員

- ・ 協議組織、運営事業者、仙台市の３者でガイドラインの内容を協議するものと理解したが、誰が最終決定権を持つのか。

内川委員

- ・ 札幌では完全に合議制で、運営事業者側から課題を上げることもある。市民や利用者の声を受ける際、当事者だけでは足りない部分が出てくる場合もあるため、共創の視点を持って互いに成長していく場は重要である。なお、ルール見直しなどの場面では、最終的な確認が必要である。
- ・ 地域の方々（まちをずっと見続けてきた方々）の役割は、空間の在り方と周囲への波及効果についてのアドバイスではないか。

コーディネーター（都市デザインワークス榊原氏）

- ・ 対等に話せる場は重要であると認識している。

氏家委員

- ・ 意見が割れたりすることはあるのか。皆が同じ目的を持って建設的な議論ができれば良いが、協議組織も一枚岩ではない場合がある。これから仙台市側で考えるべきことが出てくるだろうと懸念した。

内川委員

- ・ 札幌でも意見が割れることはあり、そうした場合は落としどころを探ることになる。運営事業者側は利用者の目線に立ちがちだが、公共施設としての公平性・平等性も必要で、そこでぶつかることもある。そういった時に周りが客観的な目線でアドバイスすることが大切で、最終的には当事者同士で話をまとめている。

馬場委員

- ・ 札幌の協議会の名称は何か。

内川委員

- ・ 活用推進会議という名前で、前向きに物事を進めるための情報共有やアドバイスを受ける場である。運営協議会というものもあり、それは運営課題について議論し地域の方も入っている。協議という言葉が今の目的に合っているか、再考が必要と思っているところ。

馬場委員

- ・ 組織の定義と役割、権限があるのかないかを明確にすべきではないか。仙台市と運営事業者が話し合い、それに対してアドバイスしたり仲裁したりする立場ならば、「アドバイザー会議」や「サポート組織」など、この組織の役割をはっきりさせた方が良い。

佐藤委員

- ・ 地元としては、イベントをやると必ず問題が起きるため、それらを防ぐ意味でも早く具体的に進めてほしい。
- ・ 運営事業者には自由度を持たせる必要があるが、自由度を持たせれば何か起こった時にどうするのかという問題が生じるため、歯止めをかけたり相談に乗るために協議組織は必要と考える。
- ・ 土地建物は仙台市のものだが、隣の第一生命ビルは民間なので、何かあった時に協議が必要である。
- ・ 最終的な決断は仙台市が責任を持って行うべきではないかと思う。仙台市内の部署連携も課題であるので、最初から対応する組織ができていた方がよいのではないか。

姥浦委員

- ・ 目的と役割が明確になれば、構成員も決まってくる。なぜこの構成員なのか、どういうステークホルダーが必要なのかを明確にすべきである。市民の関わりを受けるという言葉があるが、「市民の代表」が誰なのか。地域の方々も重要だが、若者や学生なども「市民の代表」として含めるという考え方もある。構成員の属性についても、例えば参加者が50代以上の男性ばかりなど偏りが発生しないよう、そういった意味でも多様なステークホルダーを含めるべきではないか。

コーディネーター（都市デザインワークス榊原氏）

- ・ 協議組織の名称等について、今回出た意見を踏まえ、次回最終案としてお示しできるように検討する。

姥浦委員

- ・ 過年度の検討会で議論になっていた、行政窓口の一本化と、東側も含めた勾当台公園の位置づけについて、どう考えているか。

本庁舎整備室

- ・ 「行政窓口の一本化」には、「利用者から見た窓口を一つにすること」と「市役所低層部の運営事業者が関係各課と煩雑な手続をしなくて済むような部署が必要」という 2

つの意味が含まれていると認識している。

- ・ 前者（利用者から見た窓口一本化）については、昨年度もイベント事業者などにヒアリングを行ったところ、大規模なイベントになると、一体的利活用エリアにとどまらず、たとえば定禅寺通など、ほかの公共空間も組み合わせて使うことが多いため、一体的利活用エリアとそれ以外で窓口を分けると、かえって事務手間が増えるという声が聞かれた。また、イベントに慣れている事業者の方は、これまでと手続きの仕方が変わると、申請に手間がかかるという声も聞かれた。一方で、一体的利活用の議論の中では、これまでイベントを行ったことのない方にも使っていただけるような仕組みが必要との意見をいただいていたところ。
- ・ そのほかに、行政手続きについては、窓口に行かなくてもオンラインで手続きができるよう、電子化も進めているところである。これらの状況を整理し、道路や公園を使いたい方などの窓口は、オンラインを含めて区役所等に残しつつ、初めてこのエリアを使う人の相談窓口機能などを運営事業者にも担ってもらうという想定をしている。
- ・ 後者について、低層部運営事業者の伴走組織は必要であると認識しており、当面は財政局の本庁舎整備室が伴走するが、将来的に本庁舎整備室はなくなることもあり、その後の体制は検討課題である。
- ・ 勾当台公園は西側のにぎわいの広場と東側のいきいの広場・歴史の広場に分かれており、東西を一体的に利活用することを考えた場合、大きな道路で分断されていることが課題となる。運営事業者公募にあたっては、今のところ、新本庁舎低層部から市民広場までの一体的利活用エリアを業務の対象として考えており、勾当台公園東側エリアは連携エリアとして考えている。事業者ヒアリングでは、できるだけ多くの場所を一体的に活用した方が良いという意見と、あまりに組み込みすぎると事業者側の負担が大きくなり現実的に運営が困難という意見の両方があった。運営事業者の公募に際しては、より多くの事業者から提案をいただけるよう、まずは小さくスタートし、運営事業者と意見交換しながら、必要に応じて事業を広げていくことを考えている。

6 次回開催案内

- ・ 事務局（本庁舎整備室）より第4回準備会は令和7年9月1日に仙台商工会議所7階大会議室で開催し、オンライン併用を予定していることを報告した。

7 閉会

以上